



1. 自然の恵みを大切に
2. 国土・資源の有効利用を
3. 土木技術者の責任

1. 久しぶりに琵琶湖の北端を訪れる機会に恵まれた。澄んだ空、透明の水、じっと目を凝らすと、水草やその間を泳いでいる小魚まで見える。浜辺にはヘドロも付着していない砂利が続き、湖面には遠来の水鳥が遊ぶ。街道に沿って植えられた桜並木の幹には塵埃もなく冬陽に鈍く光っており、小枝の先端には新春を迎える準備が整っている。ちらほらと森の中に散在する民家の向うには純白の雪をいただいた山々がとり囲み、ほんとうに季節感にあふれていたのしい。

この近辺の人々にとっては、このような環境はごくあたりまえのことであろうが、ふだん都市内で排気ガスや騒音や悪臭をはなつ汚水等の中で悪戦苦闘しているものにとっては、ほんとうに自然の恵みのありがたさが身にしみてうれしい。

湖面を眺めながら思うに、昭和 48 年度には日本列島の改造がいよいよ強力に進められることになり、土木屋にとっても非常に密接なかかわりあいを持つ年となる。しかしながら、わが国でもまだ残されているこのような美しい自然環境の保存に真剣に取り組むことが重要な課題であろう。これからの国民生活を豊かにするためには、従来の土木屋としての知識以外に自然界について勉強し、それを実際に応用する努力と勇気が必要であること痛感したりして、ひとり身の引き締る思いがしたが、とにかくなぜかしら心安らぐ一日が湖畔で過ごせた。 [S]

2. 最近住民の反対運動などで各地の発電所の建設が大幅に遅れ、電力の確保がむつかしくなっている。また、海外におけるエネルギー源の確保は、今後ますますきびしくなるであろうといわれている。このため、電気を有効に使うという運動も進められていて、大量消費時代から節約時代に入ったという声も聞かれる。

各種の公共施設の中には、消費量が増大するために施設を次々に建設しなければならないというものがあるが、限りある国土で自然との調和をはかりながら建設を進めていくためには、国民全体が不必要な消費を慎むことも必要なのではないだろうか。電気以外にも、水、ごみ、自動車交通など、狭い国土で供給量あるいは処理量には限度があるはずである。現在の大量消費が将来どのような結果をもたらすかを予測し、国土・資源の有効利用を考える時代に入りつつあるのではないだろうか。 [C]

3. 政府は 1 月 4 日、国土総合開発庁の機構を決め、7 月から専任大臣を置いて発足させる方針を明らかにした。

これによって、昨年から盛んに議論された日本列島改造論が国土総合開発と名をかえて実施に移されることになる。

新しい開発庁は国土開発に関する長期計画の調整権のほかには予算面での統制機能をも与えられるとのことであり、たて割行政の弊害といわれていた事業相互間の不調和、および地域間の調整不足が解消されようとしている。

しかし、従来の開発事業への批判はそうした行政面のほかに、開発事業が、とかく事業そのものの経済性を重視するあまり、自然破壊をひき起こしてきたという開発行為そのものへ向けられたものも大きい。

一般に、開発すなわち自然破壊という意識を育ててしまったことへの土木技術者の責任は重いといわなければならない。

「自然との調和のとれた国土開発」をすすめるためには、その中心となる土木技術者が計画・設計・施工のいずれにたづさわるものも視野を広くして、内部経済のみならず、外部経済、とくに外部不経済について十分な配慮を払いながら仕事をすすめる態度が必要であろう。 [J]